

市内遺跡確認調査報告書

- ・ 和田岡古墳群
- ・ 平塚古墳
- ・ 旧東海道石垣

2010

掛川市教育委員会

市内遺跡確認調査報告書

- ・和田岡古墳群
- ・平塚古墳
- ・旧東海道石垣

2010

掛川市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成6年度から平成11年度に掛川市内で実施した、和田岡古墳群、平塚古墳、旧東海道石垣の確認調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は、国および静岡県補助金を得て、掛川市教育委員会が実施した。
3. 調査の目的は、次のとおりである。

和田岡古墳群は、吉岡大塚古墳、行人塚古墳、瓢塚古墳、各和金塚古墳の4基の前方後円墳と大型円墳の春林院古墳から成り、この5基について国の史跡に指定し、将来的にも保存していくこととなった。そこで、掛川市教育委員会では、文化庁ならびに静岡県教育委員会の指導を得て、史跡指定の申請をすることとなった。このうち、各和金塚古墳、吉岡大塚古墳、行人塚古墳は、周溝が確認されているが、瓢塚古墳と春林院古墳については、周溝の所在は明らかではない。このため、この2基の古墳について、周溝の有無を確認するための調査を実施することとなった。

平塚古墳は、横穴式石室を主体部とする古墳で、6世紀後半から末の首長墓と考えられている。昭和31年に石室内の発掘調査が行われ、石室が露頭した状態になっていた。そこで、墳丘の構造等を把握するための確認調査を実施することとなった。

旧東海道石垣は、現在残る石垣及び側溝について、その構造と年代を探ることを目的に実施した。

4. 発掘調査にあたっては、地権者・耕作者の方々の多大なご理解とご協力を頂いた。
5. 現地調査ならびに報告書作成にあたっては、以下の方々にご教示、ご協力を頂いた。(五十音順、敬称略)
鈴木敏則、滝沢誠、竹内直文、平野吾郎、平林大樹、松井一明、向坂鋼二
6. 本書の執筆・編集は、掛川市教育委員会の戸塚和美の協力を得て、前田庄一が行った。
7. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 挿図における方位は、すべて磁方位である。
2. 遺物の番号は、挿図と写真図版と同一である。

目 次

例 言・凡 例	
I 和田岡古墳群確認調査	1
1. 調査体制等	1
2. 調査の内容	1
1) 春林院古墳確認調査	1
2) 瓢塚古墳確認調査	2
II 平塚古墳確認調査	3
1. 調査体制等	3
2. 調査の内容	3
III 旧東海道石垣確認調査	5
1. 調査体制等	5
2. 調査の内容	5

挿 図 目 次

第 1 図 春林院古墳確認調査トレンチ配置図	7
第 2 図 春林院古墳確認調査トレンチ実測図 (1)	8
第 3 図 春林院古墳確認調査トレンチ実測図 (2)	9
第 4 図 春林院古墳確認調査出土遺物実測図	10
第 5 図 瓢塚古墳確認調査トレンチ位置図	11
第 6 図 瓢塚古墳確認調査出土遺物実測図	12
第 7 図 平塚古墳確認調査トレンチ配置図	13
第 8 図 平塚古墳確認調査トレンチ実測図	14
第 9 図 平塚古墳確認調査出土遺物実測図	15
第 10 図 旧東海道石垣確認調査石垣実測図 (1)	16
第 11 図 旧東海道石垣確認調査石垣実測図 (2)	17
第 12 図 旧東海道石垣確認調査出土遺物実測図	18

図版目次

- 図版1 春林院古墳確認調査
Aトレンチ完掘状況（墳丘から） Bトレンチ完掘状況（墳丘から） Cトレンチ完掘状況（墳丘から）
- 図版2 春林院古墳確認調査
Eトレンチ完掘状況（南東から） Fトレンチ完掘状況（墳丘から） 出土遺物
- 図版3 瓢塚古墳確認調査
トレンチ完掘状況（北東から） 出土遺物（1） 出土遺物（2）
- 図版4 平塚古墳確認調査
第1トレンチ（左）・第4トレンチ（右）完掘状況（西から） 第2トレンチ完掘状況（南西から） 第3トレンチ南延長部分完掘状況（南から）
- 図版5 平塚古墳確認調査
第5トレンチ完掘状況（南西から） 出土遺物（1） 出土遺物（2）
- 図版6 旧東海道石垣確認調査
石垣1北端部分の状況（西から） 石垣1石垣下の胴木の状況（西から）
石垣2全景（西から）
- 図版7 旧東海道石垣確認調査
石垣2石垣と側溝の状況（南から） 石垣3石垣の状況（西から）
石垣3裏込めの状況（東から）
- 図版8 旧東海道石垣確認調査
石垣4石垣の状況（北から） 出土遺物（1） 出土遺物（2）

I 和田岡古墳群確認調査

1. 調査体制等

調査期間 平成6年10月12日～12月5日

調査員 掛川市教育委員会主任松本一男、学芸員大熊茂広

発掘作業員 大庭虎雄、鈴木欣平、村松さと、豊田八重子、宮崎充子、小沢ろく、山崎すぎ、松浦せい子、鈴木辰江、鈴木はつ子、牧野すみ江、榛葉豊子、戸塚智美、中山明美

整理作業員 榛葉豊子、戸塚智美、中山明美

2. 調査の内容

1) 春林院古墳確認調査

トレンチ調査（第1図～3図）

古墳の西側にA、B、C、東側にD、Fのトレンチを放射状に配置し、西側の平坦面には北西から南東に貫くEトレンチ、小円墳の可能性のある北西の高まりにGトレンチを設定した。

Aトレンチ（第2図）

東端から1～2.3mの範囲に葺石と思われる10～20cmほどの大きさの礫が散在していた。断面によると、墳丘の西側に幅約3.8mにわたり、10～15cmの厚さで黒褐色土（4層）が堆積し、土手状の高まりの西側に幅約4.7mにわたり、約40cmの厚さで黒褐色土（5層）が堆積していた。

Bトレンチ（第3図）

東端から0.5～2.6mの範囲に葺石と思われる10～25cmほどの大きさの礫が散在していた。最下段の礫のレベルは、約53mを測り、Aトレンチのものより25cmほど高くなる。

東端から約13.5mの地点、地山から約10cm浮いた9層中から、第4図-1の埴輪片が出土した。

Cトレンチ（第2図）

東端から1.2～3.3mの範囲に葺石と思われる礫が散在していた。25cmほどの大きさの礫が2点混じるが、大部分は10～15cmほどの礫である。最下段の礫のレベルは、52.88mである。最下段の礫から1mほど西の地点から、暗褐色土（6層）を切る幅3.3m、深度15～20cmの溝状の断面を確認した。

Dトレンチ（第2図）

西端から約1.4mまで葺石と思われる礫が分布する。大型の礫は40cm近いものもあるが、大部分は10cm程度の大きさである。最下段の礫のレベルは、51.35mを測り、古墳の西側に比べると1.5mほど低くなる。礫の東側に暗褐色土（4層）、黒褐色土（5層）を覆土とする上端の幅約3.6m、深度10～30cmの溝状の断面があり、畝状の高まりをはさんで暗褐色土（6層）を覆土とする幅約2.6m、深度15～35cmの溝状のものが存在する。この状況は、Aトレンチの状況と類似する。

Eトレンチ（第3図）

土層断面の表土層（1層）の西端の高まりは、水路掘削時の排土が堆積しているためで、その下の2層は、昭和38年調査時の排土であり、その下からも周溝の存在を思わせるものは確認されなかった。

Fトレンチ（第2図）

トレンチの西端から約4.7mまで葺石と思われる礫が散在する。大型の礫は、25～40cm近いものもあり、20cm程度のものが多く、他のA、B、C、Dトレンチに比べると、礫が一回り大きいという印象である。最下段の礫のレベルは、49.70m、Dトレンチの最下段より1.65m低くなる。土層断面図の2～5層は、昭和38年調査時の排土で、その下の6層が旧表土である。

墳丘から続く10層下が墳丘ラインと考えられるが、このラインは9層に切られている。

Gトレンチ（第2図）

2層は旧表土層で、その下の3・4層は自然堆積である。

遺物（第4図）

6・8・13はAトレンチ、1～3・7はBトレンチ、10はEトレンチ、4・5・9・11・12はFトレンチ出土である。

1の円筒埴輪は、突帯部分で直径24.4cmを測る。突帯は、器表の剥落により三角形状を呈するが、高さ1cmを測る。内外面をナデ調整する。2は円筒埴輪の口縁部、3は壺形埴輪の底部である。4は高坏か器台と考えられる。5は、外面に細かい斜めハケ、内面に粗い斜めハケ、全面に赤彩が残る。器種は不明である。6は、甕の底部付近の破片と思われる。7～11・13は、須恵器である。7の坏蓋は、口縁端部を垂下する。8は長頸瓶の頸部破片で、9は壺か甕の口縁部破片である。10は、下半が厚くなることから、底部付近の可能性はある。13は、外面に叩き目、内面に削りを施す。12の小皿は、口径7.8cm、器高1.8cmを測り、13世紀後半に位置づけられる。

成果

周溝の可能性を示すトレンチは、AトレンチとDトレンチである。Aトレンチは、古墳西側の一番北寄りに、Dトレンチは、東側の北寄りに設定したトレンチで、等高線が北から南に傾斜していることから、丘陵側を切断する溝が存在する可能性がある。

昭和38年の調査では、壺形埴輪・土師器壺が出土しているが、今回、円筒埴輪片が出土した。この円筒埴輪は、内外面をナデ調整し、高い突帯が付く点が、この古墳の西約500mに位置する吉岡大塚古墳の埴輪に酷似する。春林院古墳が、前期末から中期初頭に位置づけられ、吉岡大塚古墳は中期中葉に考えられていることから、この頃の埴輪棺等が存在した可能性がある。また、8は7世紀代に、7は奈良時代に位置づけられることから、この頃にも何らかの使用があったことが推定される。

2) 瓢塚古墳確認調査

トレンチ調査（第5図）

瓢塚古墳北側の畑に幅3m、長さ29mのトレンチを設定、掘削したが、地表から25～67cmの深度から重機による掘削の跡を確認し、その下は地山であった。遺構はまったく検出されなかった。

遺物（第6図）

1～9は、須恵器である。1～6・8は、胎土中に2～4mmの白色の石を多く含んでいて、内面にかすかに当て具痕を残すことから、同一個体の可能性がある。7と9は、色調と器壁の薄さという共通点があり、同一個体の可能性がある。1～9が、同一個体の可能性もある。大きさが推定できるのは1で、体部最大径25.4cmと推定される。壺の破片の可能性はある。10～13は、土師器高坏で、13は、古墳時代後期に位置づけられる短脚の高坏で、器壁を厚く作る。14は、弥生時代後期に位置づけられる壺で、口縁部は受け口状を呈すると思われ、肩部に沈線が巡る。15は、山茶碗の口縁部破片である。

成果

今回の確認調査では、畑の開墾による攪乱状況が見られ、周溝の有無については確定できなかった。また、他の時代の遺構もまったく確認できなかったが、弥生時代、古墳時代中期、古墳時代後期の遺物が出土していることから、これらの時代に何らかの形で使用されていたことが明らかとなった。

II 平塚古墳確認調査

1. 調査体制等

調査期間 平成10年1月16日～3月25日

調査員 掛川市教育委員会主任前田庄一

発掘作業員 鈴木静江、弓桁きよ、中村すま子、西田泰子、加藤しな、榛葉君江、杉森和、原田守、鈴木敬、向川隆、大庭虎雄、長谷川勇次郎

2. 調査の内容

トレンチ調査（第7図・8図）

横穴式石室と墳丘の大部分が残る山林部分を対象に、トレンチ調査を実施することとした。周溝の有無を確認するために、第1、第3、第4、第5、第6の5本を、前溝・墓道の方向を確認するために、第2、第3トレンチ南延長部分の2本のトレンチを設定した。

第1トレンチ（第8図）

石室側に厚く堆積する2層（暗灰褐色土）は、昭和31年の発掘調査による排土、その下の3層（茶褐色土）が当時の表土と考えられる。3層下の4層（暗灰褐色土）、5層（暗灰褐色土）、7層（灰褐色土）は、古墳の盛り土の可能性がある。6層（暗茶褐色土）は、非常に固く締まり、8層（暗褐色土）は固く締まり、古墳の盛り土と考えられる。

トレンチの東半は、盛り土の状況を見るために深く掘り下げた。9層（暗赤褐色土）と11層（灰褐色土）の性格はわからないが、10層（黒色土）、12層（暗黒灰色土）は、盛り土と考えられる。15層（黒色土）は、古墳造成時の地山と考えられる。この15層を切る13層（暗灰褐色土）と14層（暗灰褐色土）は周溝と考えている。この13層・14層の上端の幅は約2.2m、深度は35cmである。16層（灰褐色土）、17層（灰褐色粘質土）、18層（黄灰色土）は、地山と考えている。

第2トレンチ（第8図）

1層（灰褐色土）は、昭和31年の発掘調査時の排土と考えられ、その下の2層（褐色土）は性格不明である。3層（暗褐色土）が前溝の覆土で、4層（褐色砂利層）は盛り土と考えられる。3層の底面近くには、長径20～30cm程度の礫が混入していた。

第3トレンチ（第8図）

2層（暗灰褐色土）・3層（灰褐色土）は、昭和31年の発掘調査時の排土、その下の4層（暗赤褐色土）が当時の表土と考えられる。8層（暗茶褐色土）は盛り土と考えられ、この8層を切る6層（暗褐色土）と7層（黒灰色土）は墓道の覆土と考えられる。9層は、攪乱の可能性が高い。10層（黒色土）に縄文土器と弥生土器が混入し、11層に縄文土器が混入することから、10層が縄文時代から古墳築造までの包含層、11層は縄文時代の包含層と考えられる。

第3トレンチ南延長部分（第8図）

第3トレンチの南端で確認された、墓道の幅と深度を確認するために設定、掘削した。

12層（黒褐色土）は、古墳築造時の地山と考えられ、この12層を切る4層～11層が墓道と考えられる。10層（暗黄褐色土）は、墓道の底面から約20cm浮いた高さから検出された水平の堆積で、追葬に伴う墓道整備等の可能性がある。第2トレンチ同様、長径10～20cmの礫が検出された。

第4トレンチ（第8図）

2層（暗灰褐色土）から、第9図-24のかわらけが出土した。3層（黒褐色土）には、縄文、弥生土器が比較的多く混入するが、盛り土の可能性がある。4層（暗褐色土）は、縄文、弥生土器が少量混

じるが、盛り土の可能性はある。6層（黒灰色土）と7層（灰褐色粘質土）は、地山である。この地山を切る5層（暗灰褐色土）は、周溝覆土の可能性はある。

第5トレンチ（第8図）

1層（暗灰褐色土）は、昭和31年の発掘調査時の排土の可能性はある。2層（茶褐色土）は当時の表土、5層（暗灰褐色土）は盛り土と考えられ、6層（暗茶褐色土）は盛り土の可能性はある。7層（暗黄灰色土）・8層（暗灰褐色土）・9層（暗褐色土）は、固く締まり、盛り土と考えられる。9層中には、長径5mm程度の炭化物が比較的多く混入した。10層（暗黄褐色粘土）は非常に固く締まり、盛り土と考えられる。水平に堆積する11層（暗茶褐色土）・12層（暗褐色土）・13層（灰褐色土）は、固く締まり、盛り土の可能性はある。14層（黒褐色土）と15層（暗灰褐色土）は、古墳より古い時期の遺構の可能性はあるが、土は固く締まる。16層（明褐色土）は、地山である。9層～12層を切る17層（暗灰褐色土）は、周溝の可能性があると考えている。17層は上端の幅2.15m、深度は最大で60cmを測る。17層の底面のレベルは約48.90mで、第1トレンチで周溝と考えた13層・14層の底面のレベル約48.30mに比べ、60cmほど高くなる。

第6トレンチ（第8図）

1層（暗褐色土）は、茶畑の境の溝を掘って上げた土で、2層（暗灰褐色土）が旧表土、4層（黒褐色土）は盛り土と考えられる。5層（暗茶褐色土）は盛り土の可能性が高く、古墳時代以前の遺構を壊しているのか、焼土が少量混入する。4層を切る3層（暗褐色土）が周溝の可能性があると考えていて、底面のレベルは、約49.20mである。

遺物（第9図）

古墳に伴うと思われるものが、1～20、弥生時代後期が、21・22、古墳より後の時代が、23・24である。

1～8は第1トレンチ、9は第2トレンチ、10～13は第3トレンチ、14～17は第4トレンチ、18～20は第5トレンチ出土である。

1の坏蓋は、口径12.5cm、最大径12.8cmを測り、稜は明瞭である。2は最大径16.2cmを測る大型で、有蓋高坏の坏部と考えられる。4の外面は、叩き後に沈線、カキ目が施される。直径50cm前後の甕と推定される。5の外面は、叩き後にカキ目調整が施され、直径20cm前後の瓶類と推定される。7は土師器で、小型の高坏か手捏ね土器と思われる。8は、土師器高坏である。9は短頸壺の肩部分で、外面にカキ目調整が施される。11は最大径16.0cmを測り、有蓋高坏の坏部と考えられる。13は、脚端部の径12.0cmを測る小型高坏の脚と考えられる。14と16の外面は、叩き後にカキ目調整が施され、同一個体の可能性はある。直径40cmを超える甕と推定される。18は、口径13.9cmを測る坏蓋で、稜は沈線状を呈し、口縁端部内面に段が付く。21・22は、弥生時代後期の高坏で、21は口径21.6cmを測る坏部、22は接合部である。22の外面には羽状文が1段半確認できる。23は、山茶碗の体部破片である。24は口径10.4cm、器高3.1cmを測るかわらけで、16世紀後半に位置づけられる。

成果

今回、墳丘の東側から幅約2mの周溝と思われる断面が確認された。この断面を結ぶと直線状を呈することから、従来、円墳とされてきたが、方墳の可能性も指摘できる。ただし、墳形については、茶畑側を掘らないかぎり、断定はできない。

墓道については、今まで調査されたことはなかったが、幅2m以上で、古墳の前で東側の谷に下りていくことが確認できた。

Ⅲ 旧東海道石垣確認調査

1. 調査体制等

調査期間 平成12年2月10日～3月27日

調査員 掛川市教育委員会学芸員村松弘規

発掘作業員 田辺富士夫、鈴木金平、西田泰子、井筒いつよ、田辺きみ江、榛葉豊子、松浦富美江、清光真由美

2. 調査の内容

トレンチ調査（第10図・11図）

旧東海道の石垣は、天保14年（1843）の東海道日坂宿の「御尋ニ付申上候書付」に記録が見える。今回の確認調査は、現在残る石垣及び側溝が、この記録に見える石垣と同一のものであるのか、また、構造を探ることを目的に実施した。

石垣は、日坂宿から東海道の難所の一つである小夜の中山峠に向かう坂道の脇に存在する。現在、石垣は4箇所に露頭していて、小夜の中山峠に近いものから、石垣1、石垣2、石垣3、石垣4と呼称した。そして、石垣4にAトレンチ、石垣3にBトレンチ・Cトレンチ、石垣1にDトレンチを設定した。

Aトレンチ（第10図）

石垣には、30～65cm程度の大きさの石が使われていて、現在2段分が残っている。石垣1と石垣2の上端は水平であるが、この石垣の上端には段差があることから、上段の石垣が失われている可能性がある。石垣の高さは、最大で約90cmを測る。石垣1・2は隙間なく石が積まれているが、ここでは石の間に間詰めがある。石垣の表面より控えを長くして石を安定させている。裏込め石は、石垣の石を加工した余剰の石と思われ、裏込め土は水平堆積ではない。

Bトレンチ（第10図）

石垣2の北端に位置する上下2段の石垣を、石垣3と呼称し、その下段の石垣を対象に掘削したトレンチである。

石垣は、前面を崩落した土が覆っていて、2段分しか確認できない。2段目の石の上端の高さは、石垣2の3段目の上端の高さと同じである。石垣の上端を4層（灰茶褐色土）が覆っていて、本来もう1段存在したかどうかは不明である。石垣裏込めの6層（灰白色土）は、水平堆積である。

石は、35～65cm程度の大きさで、石垣4と変わらないが、石は隙間なく積まれている。

Cトレンチ（第10図）

石垣3の下段の石垣の約1m奥の上段に存在する3～4段の石垣で、現存の高さは、約1mを測る。

石垣2（第10図）

石垣1との間に平成10年の土砂崩れの後に積まれた蛇籠があり、その北側に位置する石垣である。本来は石垣1とつながっていた可能性があるが、平成10年当時蛇籠部分に石垣は存在しなかったとのことである。石垣は、小さな石で20cm程度、大きなものは65cmほどの大きさの四角形から六角形の石を組み合わせて積まれていて、4段分、高さ約1.0m～1.2mが確認できる。石垣上端と側溝の傾斜が同じであることから、道路の傾斜に合わせ積まれているものと考えられる。根石の下に胴木が存在する。

側溝は、約4.8m分が残る。石垣の根石との間に隙間が存在する部分がある。石は、20～55cmと石垣の石より一回り小振りである。側溝の幅は約30cm、勾配は約7°である。

旧東海道の縁に存在したと思われる縁石が2.2m分残存していた。縁石の高さは、側溝から約10cmである。

石垣1（第11図）

最南端に位置する石垣である。この付近に日坂宿の東木戸が存在したとの伝承があることから、石垣が途切れる部分にDトレンチを設定し、掘削した。

石垣は、4段に積まれ、高さ約1.1mを測る。石の形状・規模は、石垣2と同じである。この部分の根石の下には、胴木が存在した。北端約1mの部分は、石の間に隙間、間詰めがあり、積み直されていることがわかる。

石垣の南端には、奥に1列に続く石列が存在した。当初、この石の南側に木戸の跡があると想定し、Dトレンチを設定、掘削したが、その痕跡を確認できなかった。そこで、石列の北側を掘削すると、この石列の下に石積みが存在することが判明した。この石積みの北側、石垣1より約1m奥に3段、高さ約85cmの石垣が存在した。

遺物（第12図）

1は石垣1のDトレンチ、2～9は石垣3のBトレンチ、10～18は石垣4のAトレンチ出土である。

1は、口径11.0cmを測る肥前産の染付碗で、外面に草花文、口縁部内面にたすき文を描く。2は、口径11.2cmを測り内外面に網目文を描く、肥前産の染付碗である。3は、口径11.0cmを測る肥前産の染付丸碗で、外面に竹笹文を描く。4は、口径8.0cmを測る肥前産の染付湯呑みで、外面に草花文を描く。5は肥前産の染付湯呑みの底部破片である。6は、口径9.7cm、器高2.65cmを測る肥前産の染付丸碗の蓋で、外面に立湧文、内面に雷文を描く。7は、口径13.6cm、器高3.35cmを測る肥前産の染付皿で、外面に草花文、内面に旗か帆掛け船を描く。8は、口径7.7cm、器高1.15cmを測る瀬戸・美濃産の灰釉の蓋である。9は、口径6.2cmを測る肥前産の青磁土瓶で、体部の中ほどを欠損する。10は、口径8.9cmを測る肥前産の湯呑みで、外面に鶴文を描く。11は、肥前産の染付碗である。12は、高台径4.1cmを測る肥前産の染付湯呑みで、外面に面取りを16面施す。13は、口径7.6cmを測る肥前産の猪口で、竹文を描く。14は、肥前産の銚子の底部で、底径4.5cmを測る。15は、肥前産の染付小瓶で、肩に陣笠、陣羽織、旗を描く。16は、肥前産の銚子である。17は、口径9.8cmを測る肥前産の青磁壺である。18は、口径17.0cm、器高11.8cmを測る無釉の陶器で、底部近くに直径2.1cmの穴が開けられていて、反対側にも穴がある。口縁端部と底部外面に癒着による剥離があり、用途は匣鉢を想定させるが、口縁部外面にスタンプが押されていることから、別の用途も考えられる。

これらの陶磁器は、18世紀前半に8・15・18、18世紀後半に13・14、19世紀前半に1・2・7・9・11・17、19世紀中葉に3、19世紀後半に4～6・10・12・16、が位置づけられる。

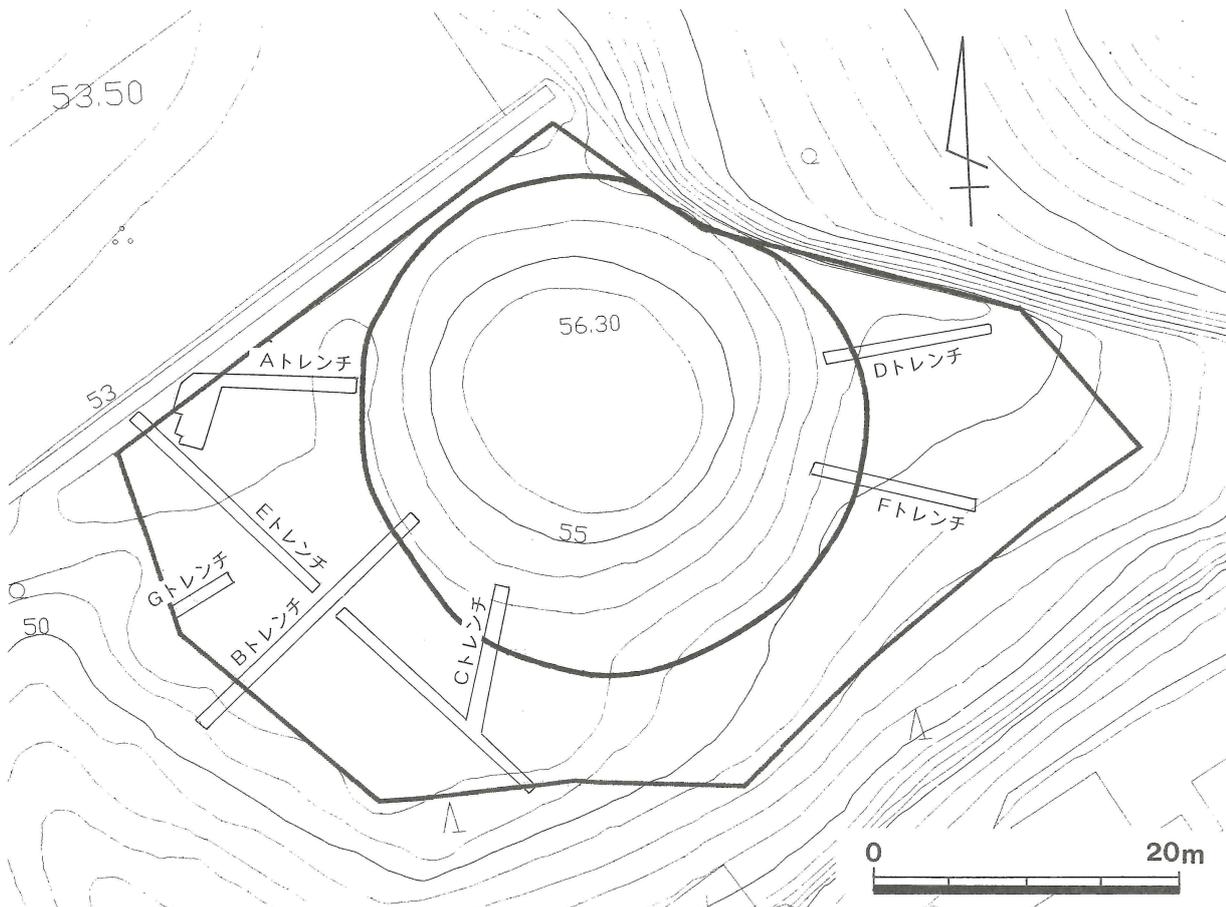
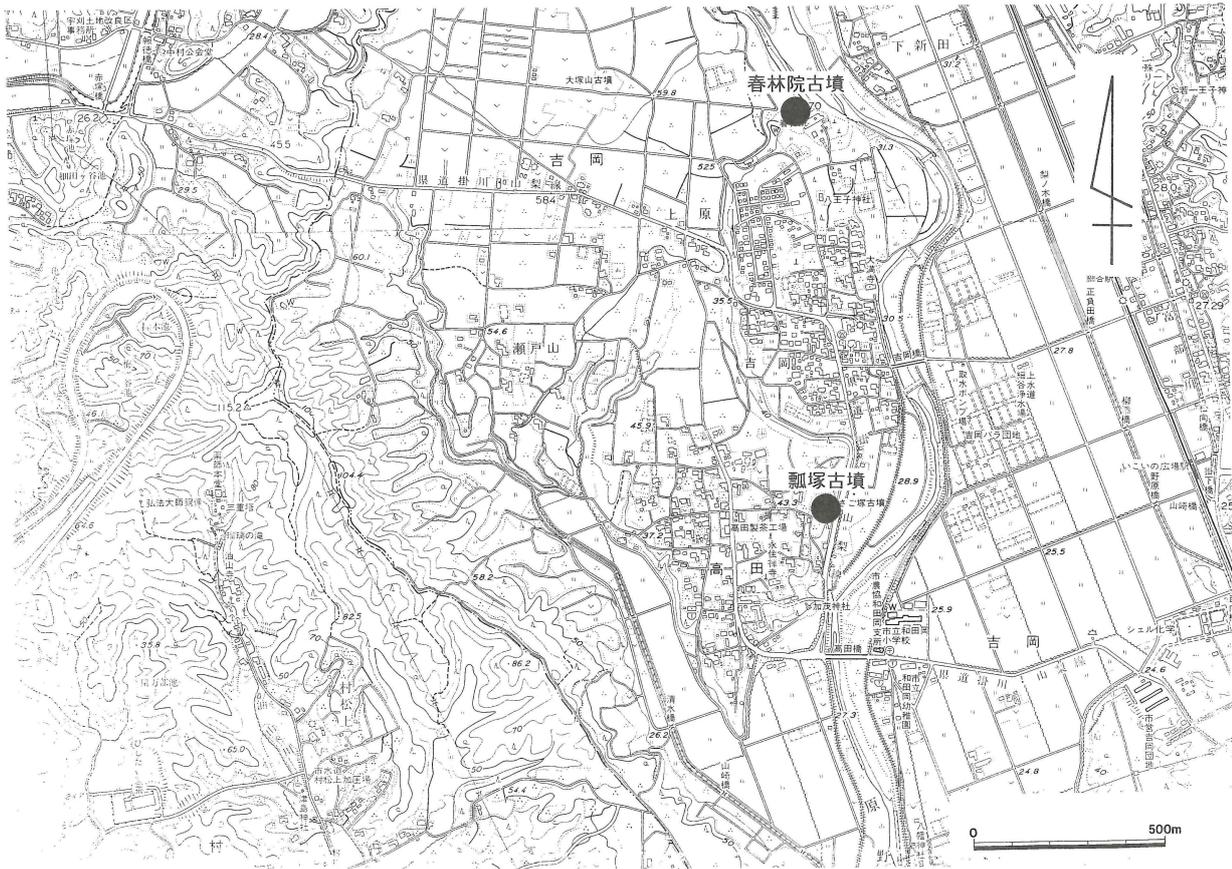
成果

天保14年（1843）の「御尋ニ付申上候書付」には、「一 石垣壱ヶ所 上段 長拾七間五尺 下段長式拾貳間 宿東入口 是は江戸右側前々方御普請所ニ御座候」と石垣の記述がある。

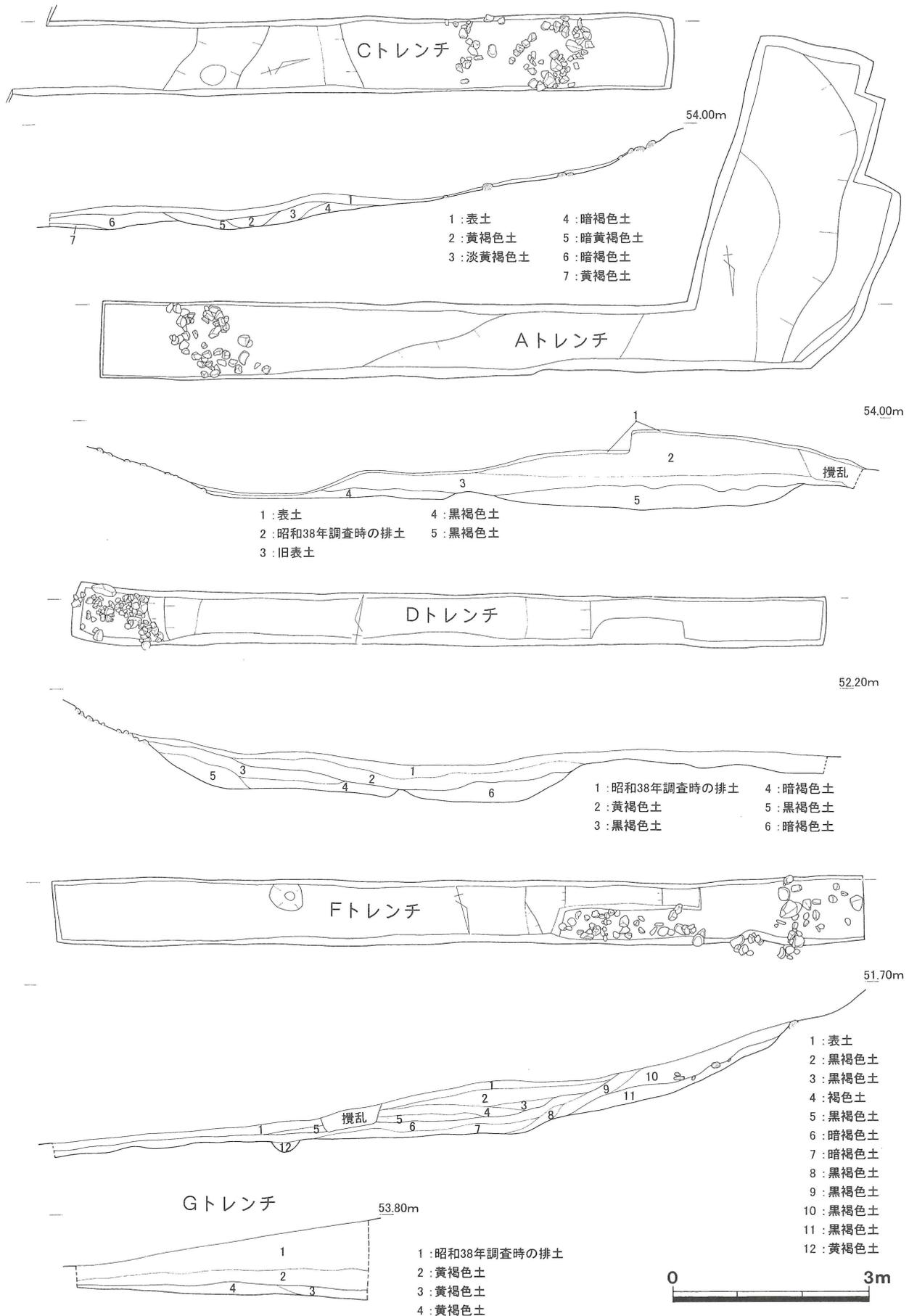
この記録によると、上段が約32.1m、下段が約39.6mという規模になり、石垣1から石垣4まで、約37.8mであることから、天保14年の記録に見える下段の石垣に相当すると考えられる。

石垣1に見られる積み直しは、「前々方御普請所ニ御座候」を裏付けるものといえる。

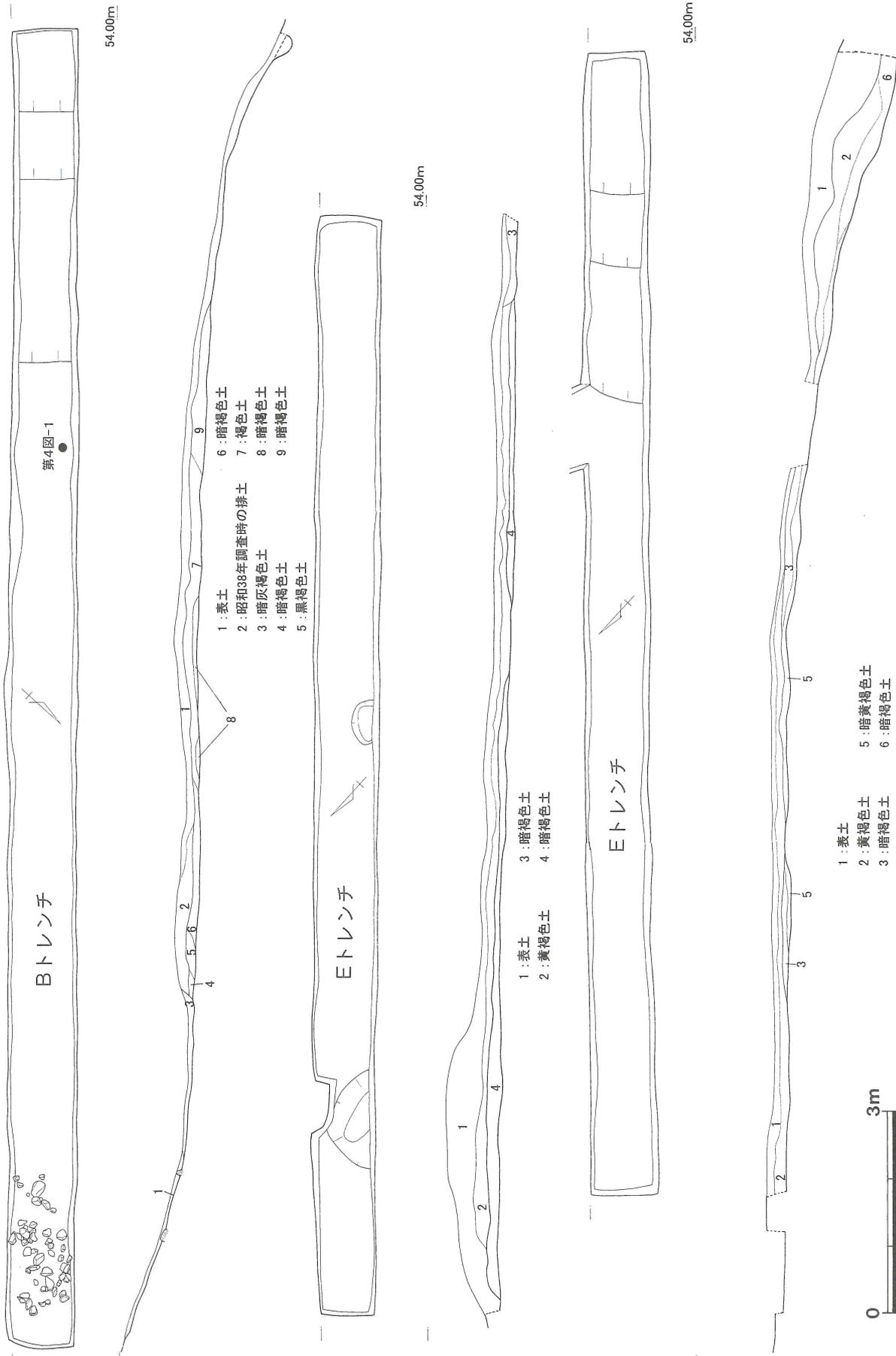
今回の確認調査により出土した陶磁器は、周辺に存在した茶店等で廃棄されたものと考えられる。これらの陶磁器は、石垣を覆う土から出土していることから、石垣の築造時期を断定できるものではないが、下限を19世紀後半とすることができる資料である。



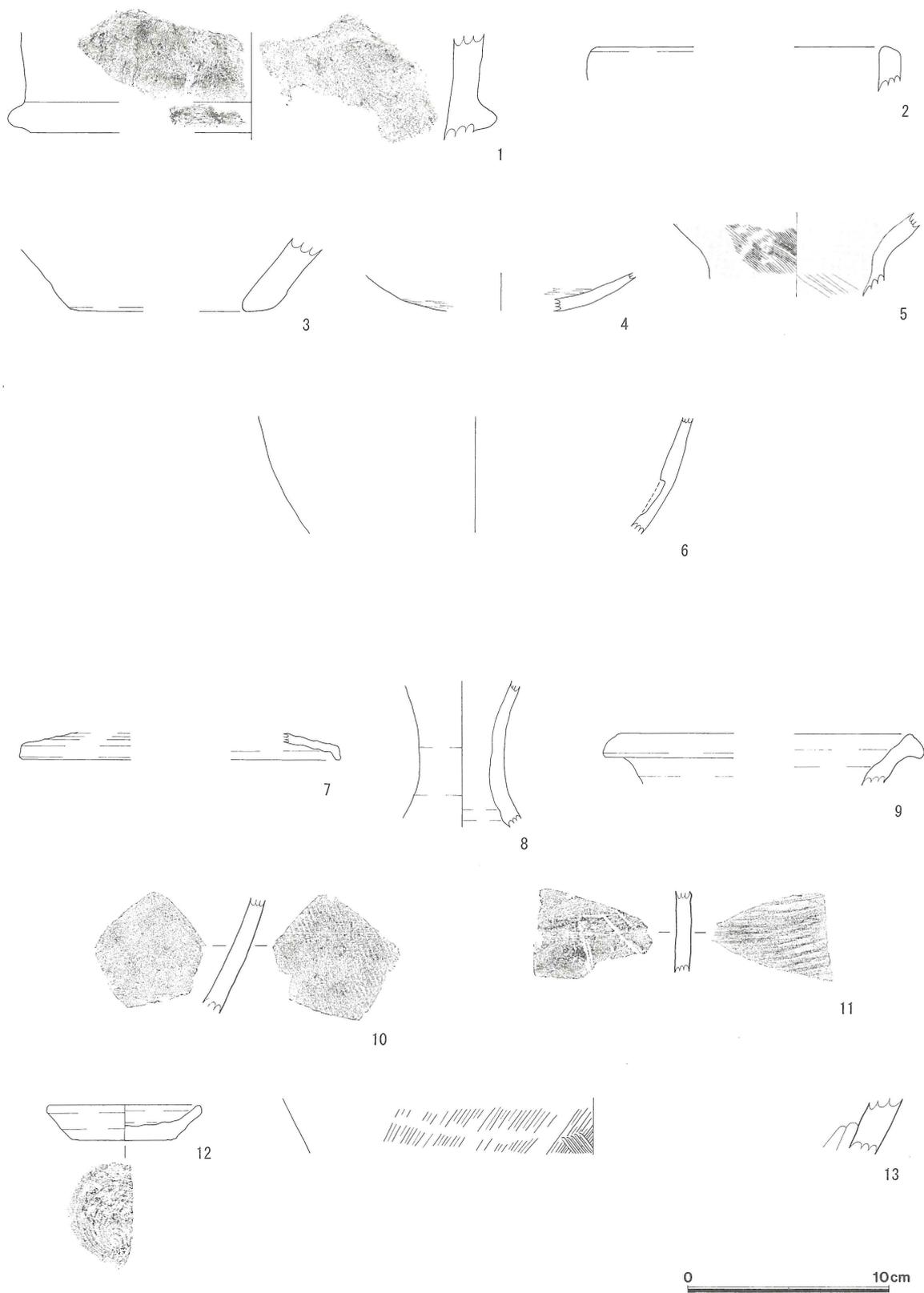
第1図 春林院古墳確認調査トレンチ配置図



第2図 春林院古墳確認調査トレンチ実測図(1)



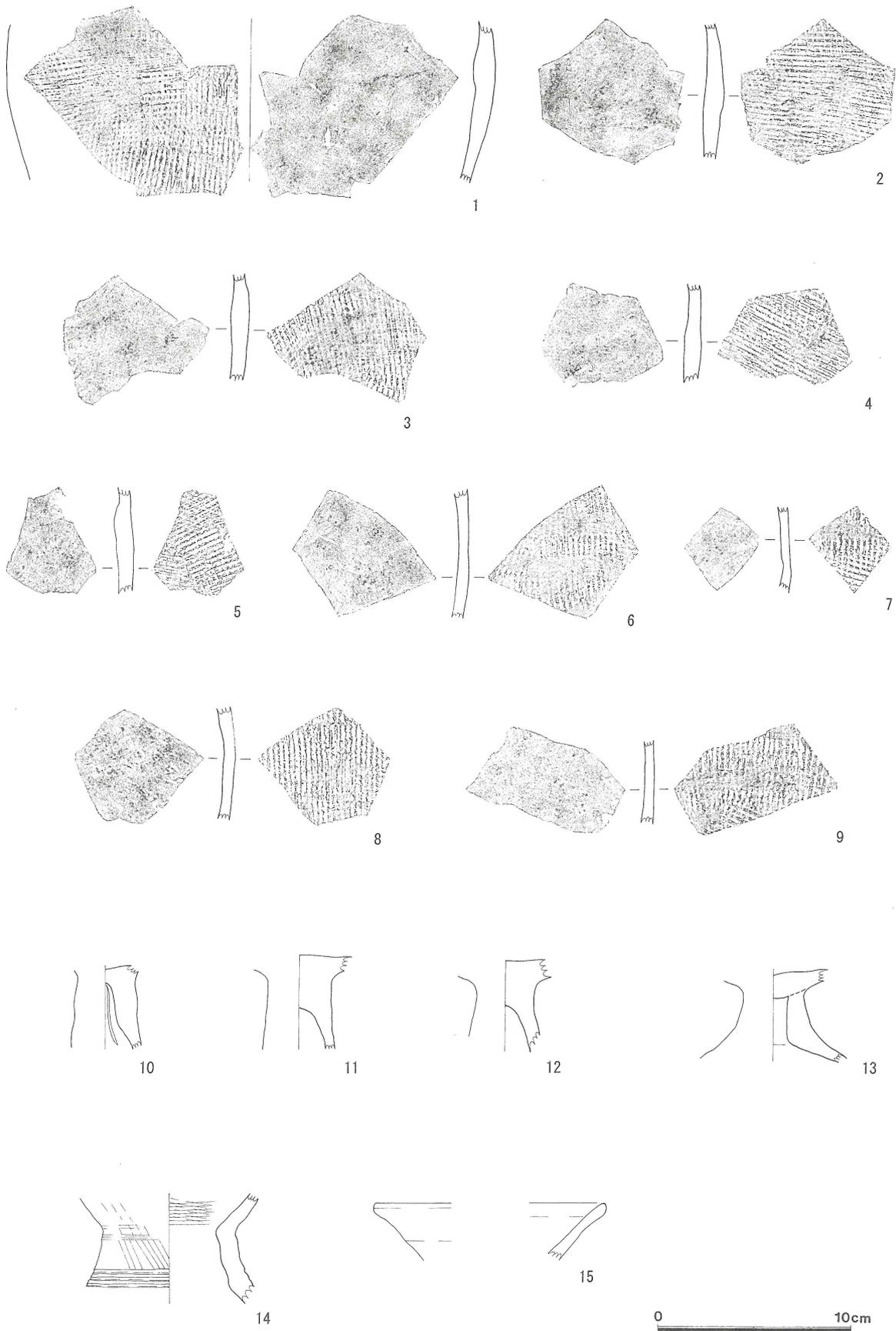
第3図 春林院古墳確認調査トレンチ実測図(2)



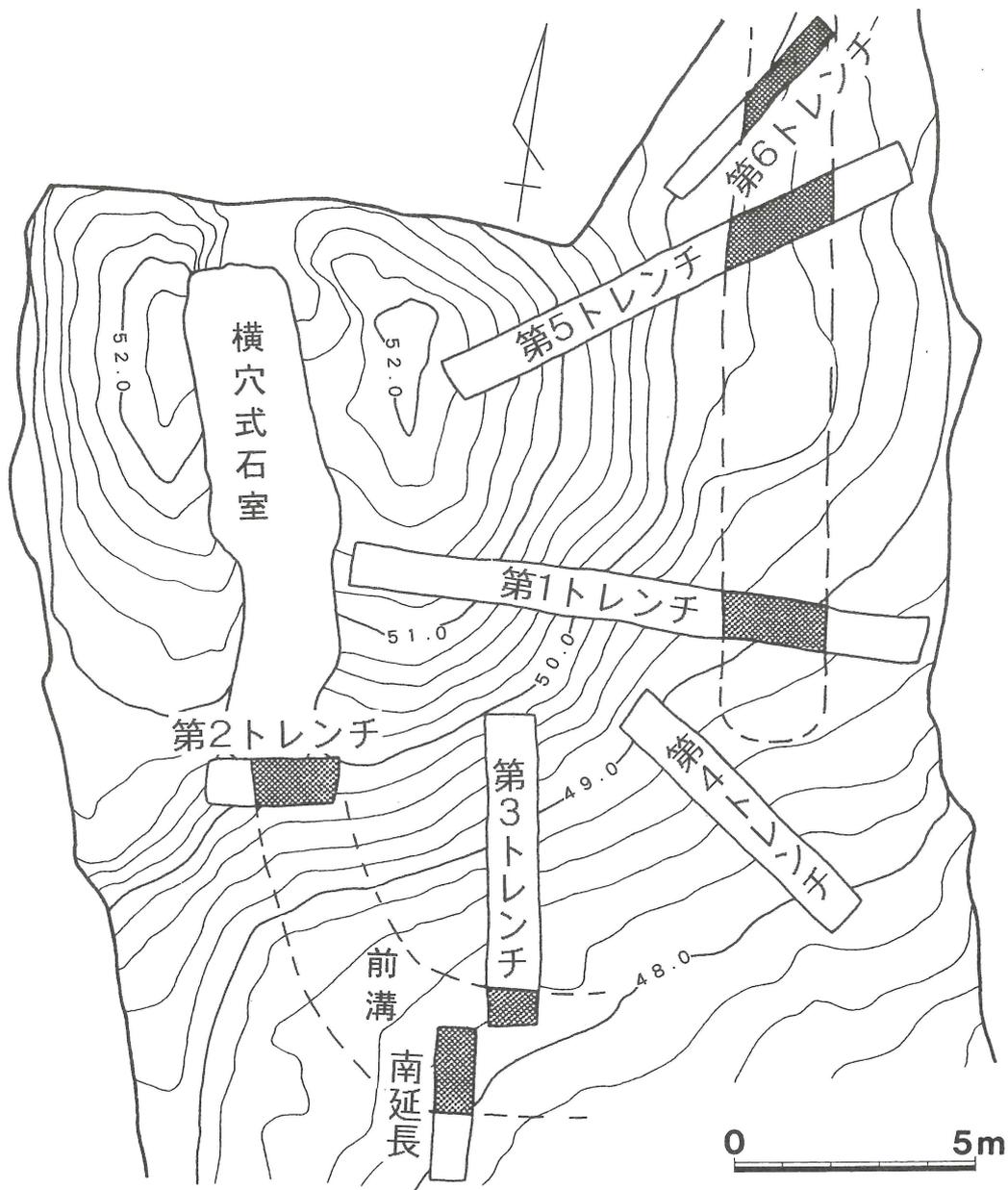
第4図 春林院古墳確認調査出土遺物実測図



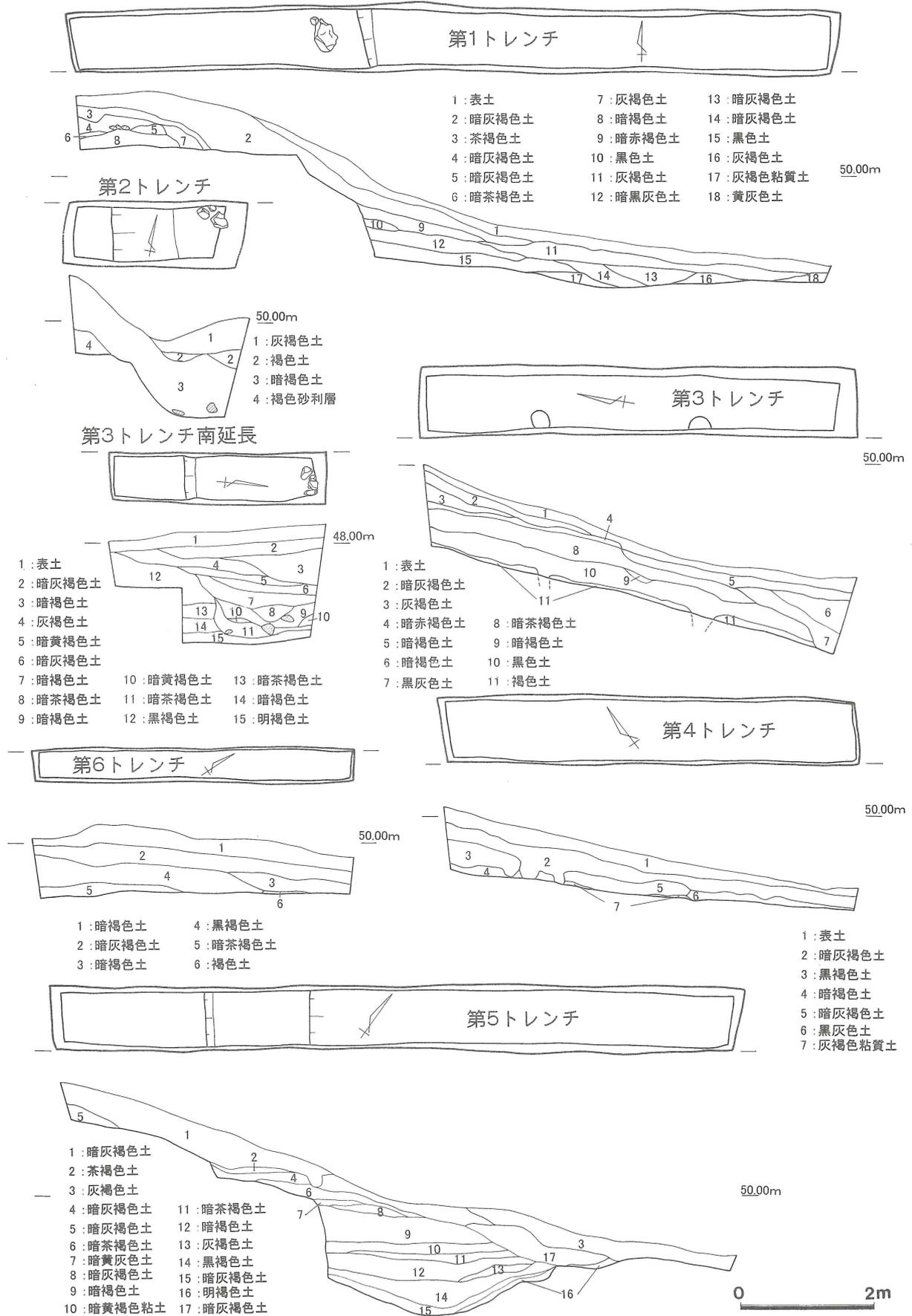
第5図 瓢塚古墳確認調査トレンチ位置図



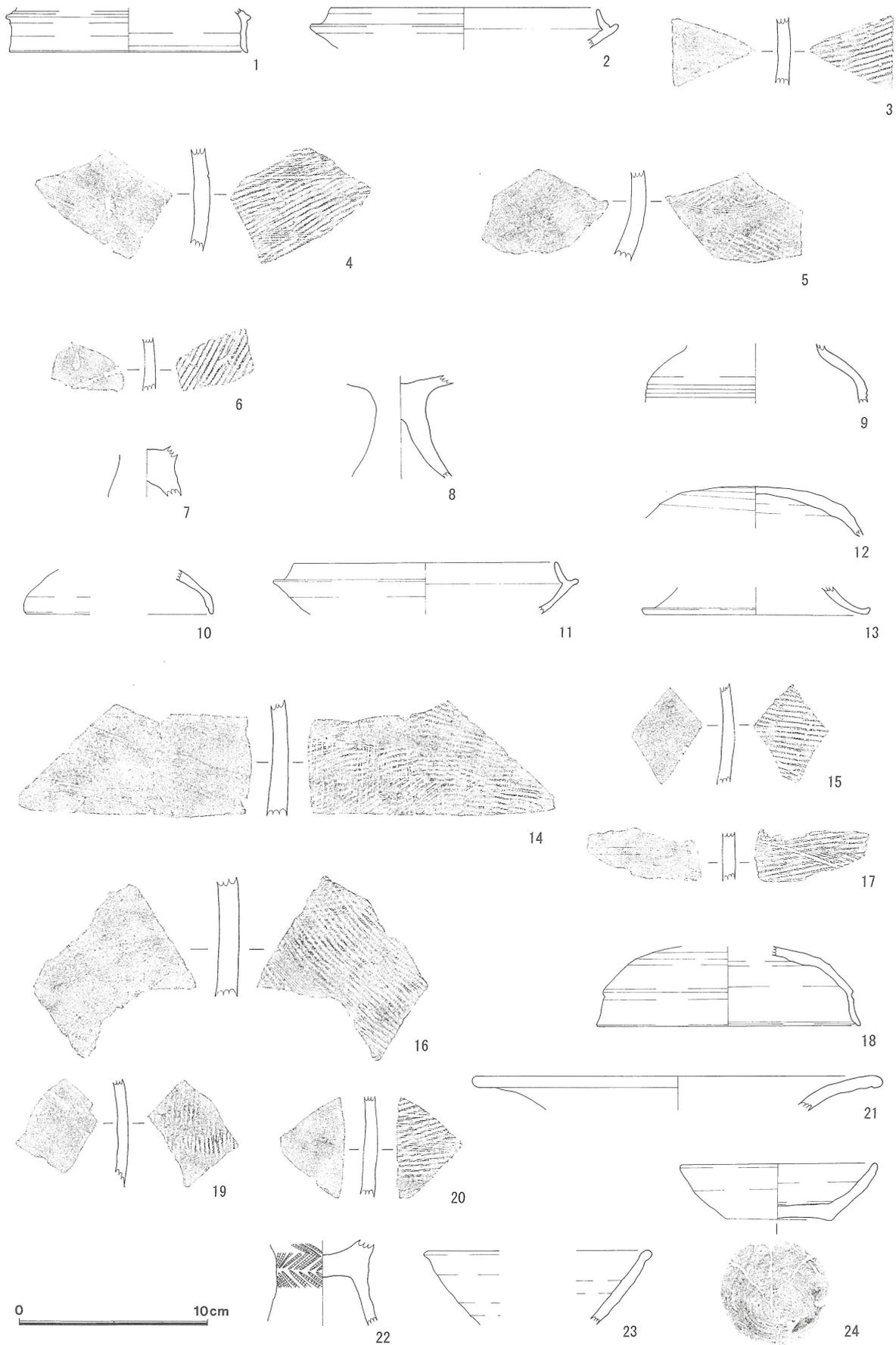
第6図 瓢塚古墳確認調査出土遺物実測図



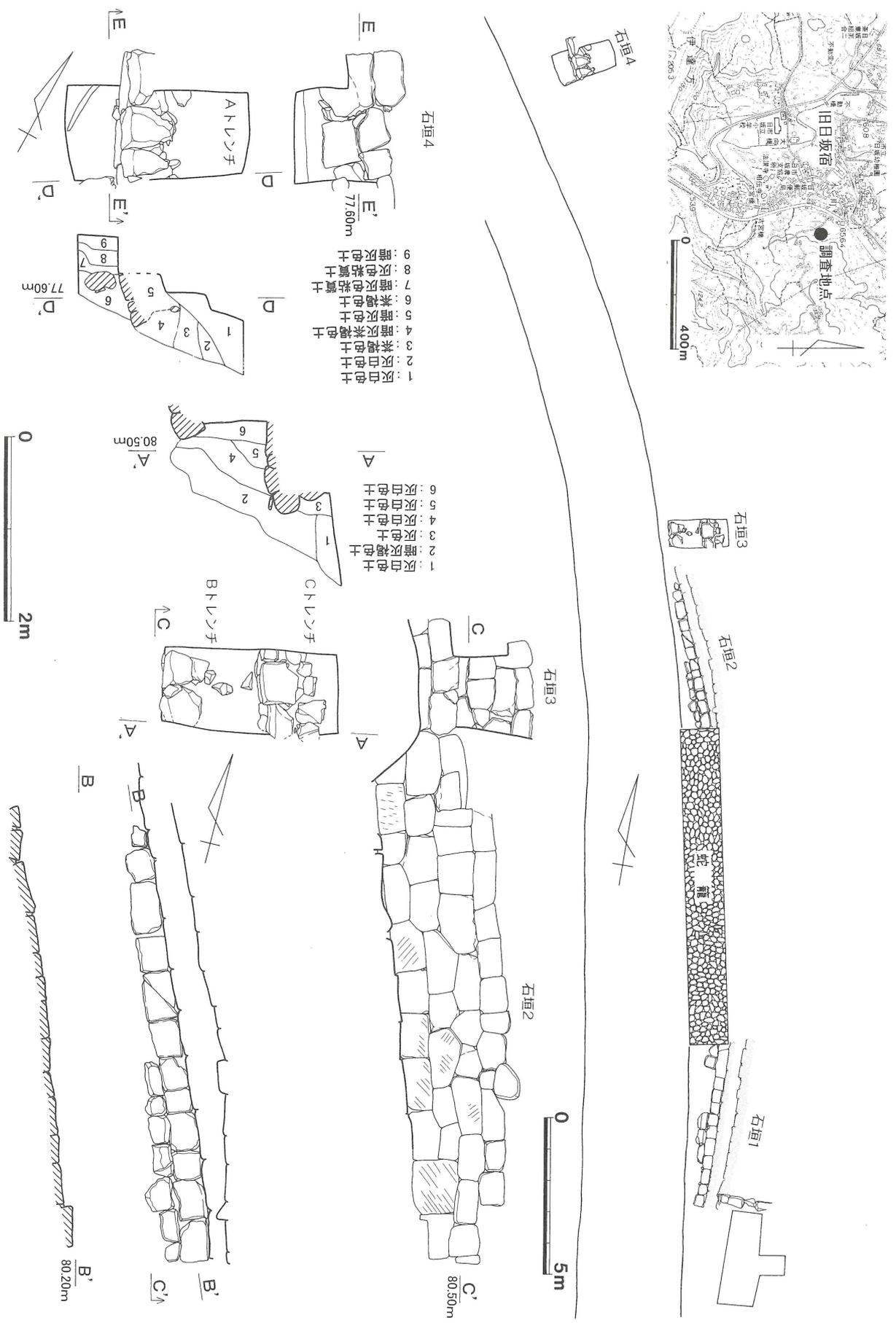
第7図 平塚古墳確認調査トレンチ配置図



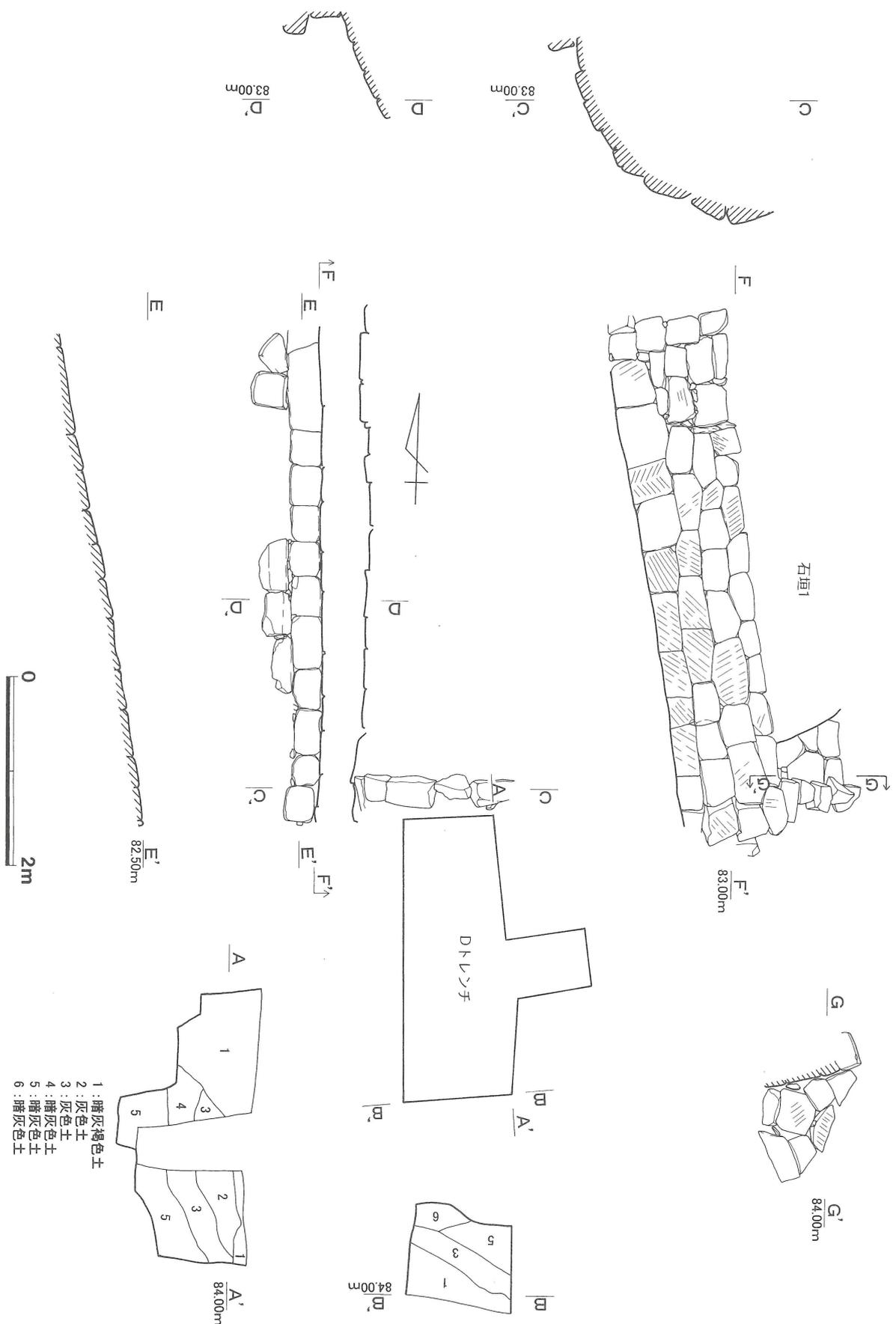
第8図 平塚古墳確認調査トレンチ実測図



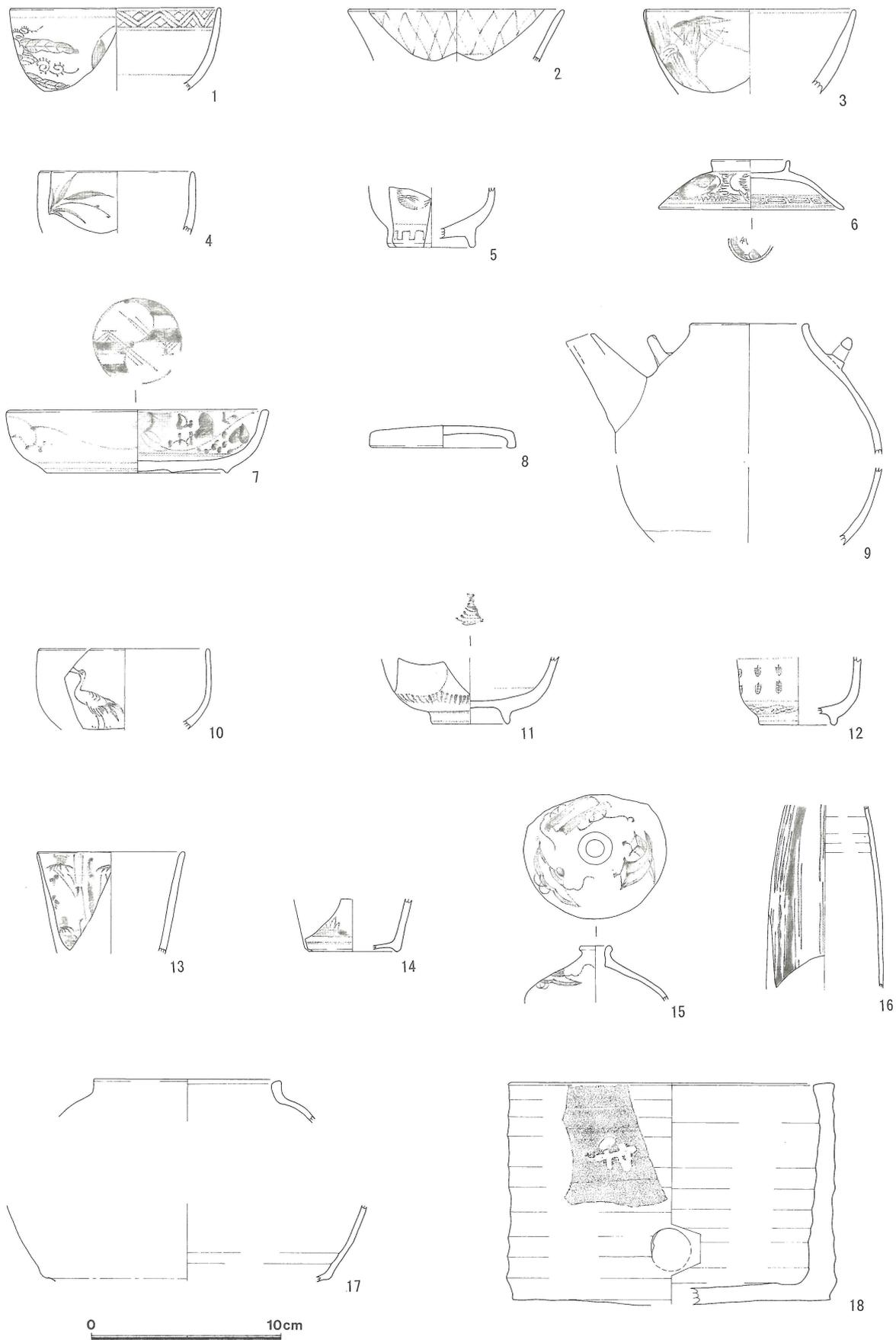
第9図 平塚古墳確認調査出土遺物実測図



第10図 旧東海道石垣確認調査石垣実測図 (1)



第11図 旧東海道石垣確認調査石垣実測図 (2)



第12図 旧東海道石垣確認調査出土遺物実測図

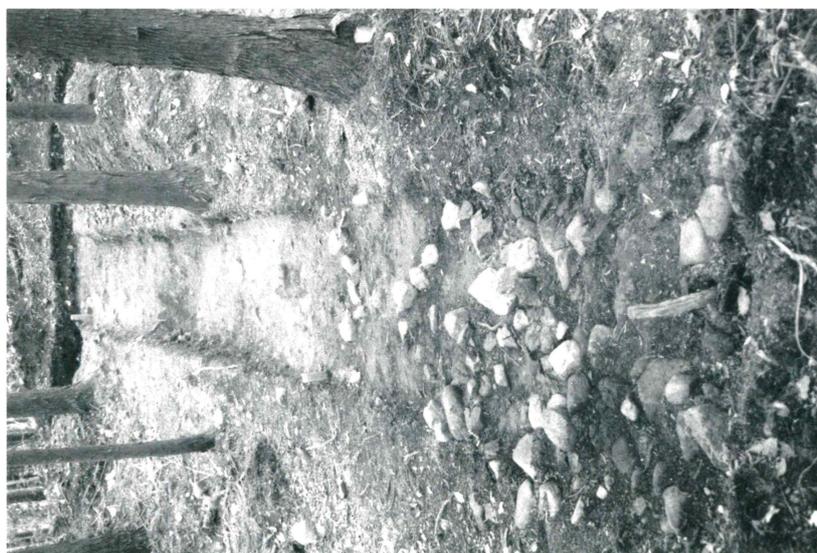
図版1 春林院古墳確認調査



A トレンチ完掘状況
(墳丘から)



B トレンチ完掘状況
(墳丘から)



C トレンチ完掘状況
(墳丘から)

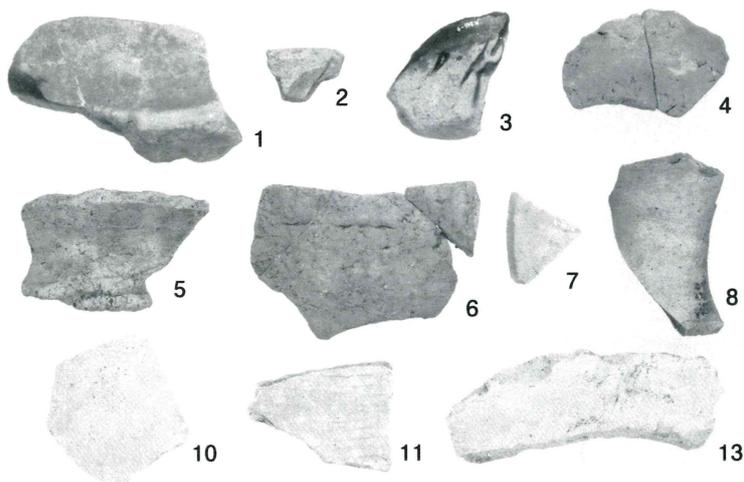
図版2 春林院古墳確認調査



E トレンチ完掘状況
(南東から)



F トレンチ完掘状況
(墳丘から)

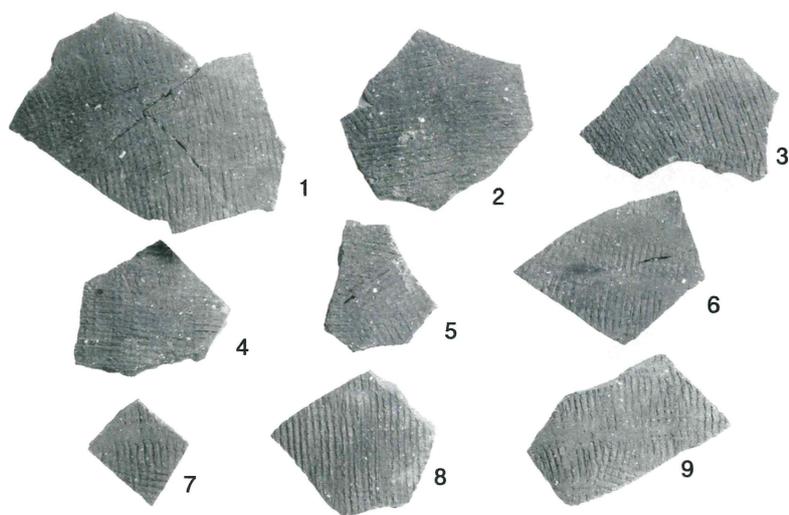


出土遺物

図版3 瓢塚古墳確認調査



トレンチ完掘状況
(北東から)



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

図版4 平塚古墳確認調査



第1トレンチ(左)・第4トレンチ(右)
完掘状況(西から)



第2トレンチ完掘状況
(南西から)

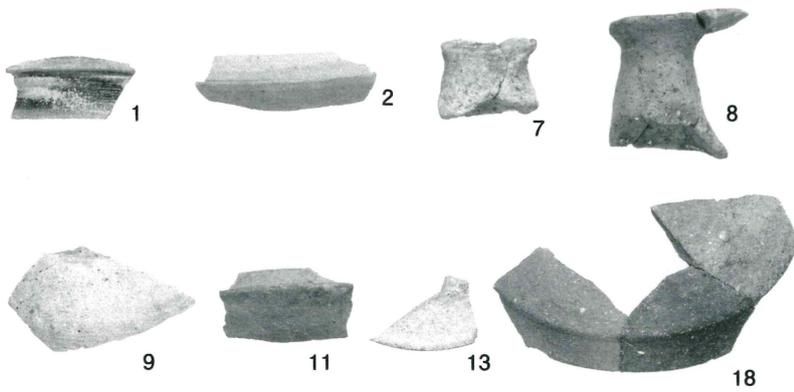


第3トレンチ南延長部分
完掘状況(南から)

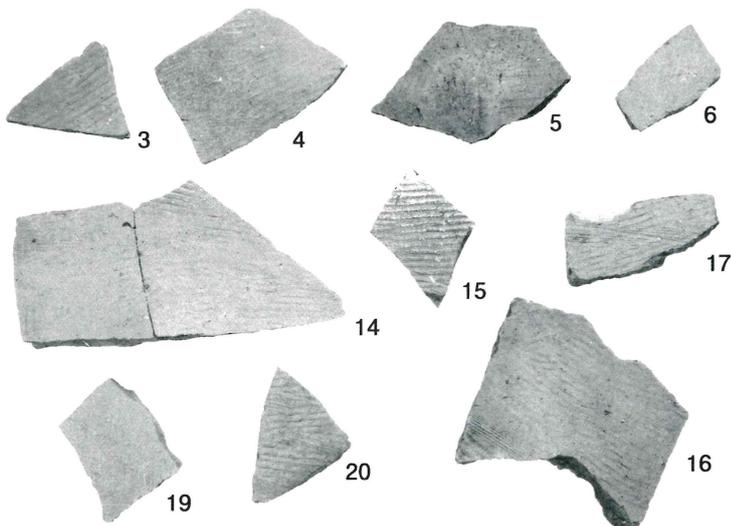
図版5 平塚古墳確認調査



第5トレンチ完掘状況
(南西から)



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

図版6 旧東海道石垣確認調査



石垣1 北端部分の状況
(西から)



石垣1 石垣下の胴木の状況
(西から)



石垣2 全景 (西から)

図版7 旧東海道石垣確認調査



石垣2 石垣と側溝の状況
(南から)



石垣3 石垣の状況
(西から)

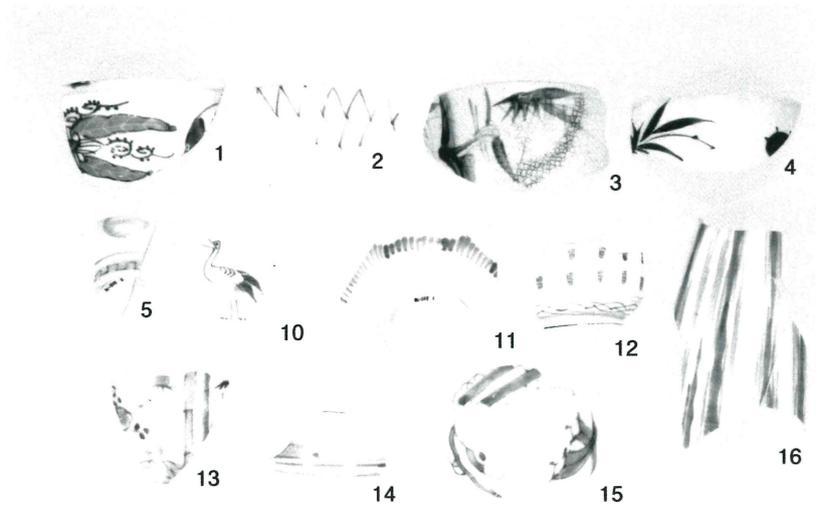


石垣3 裏込めの状況
(東から)

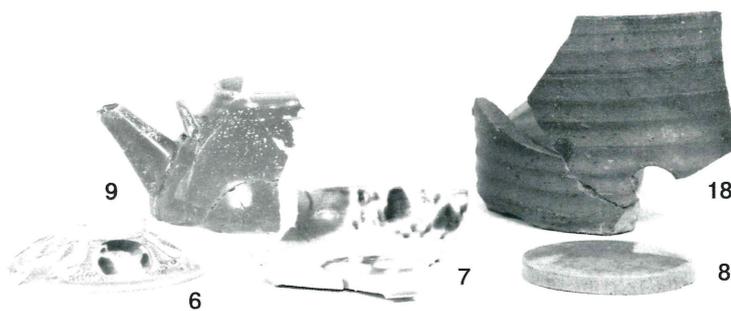
図版8 旧東海道石垣確認調査



石垣4 石垣の状況
(北から)



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	しないいせきかくにんちょうさほうこくしょ
書名	市内遺跡確認調査報告書
副書名	和田岡古墳群 平塚古墳 旧東海道石垣
編著者名	前田庄一・戸塚和美
編集機関	掛川市教育委員会
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1
発行年月日	西暦2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わだおかこみんかかくにんちょうさ 和田岡古墳群確認調査	静岡県掛川市吉岡・高田	22213	K-243	34度 47分 49秒	137度 57分 9秒	1994年10月 ～ 1994年12月	173㎡	内容確認
ひらつかこみんかかくにんちょうさ 平塚古墳確認調査	静岡県掛川市上西郷		K-243	34度 48分 16秒	138度 00分 31秒	1998年1月 ～ 1998年3月	450㎡	内容確認
きゅうとうかいどういしがきかくにんちょうさ 旧東海道石垣確認調査	静岡県掛川市日坂		K-243	34度 48分 14秒	138度 4分 38秒	2000年2月 ～ 2000年3月	40㎡	内容確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
和田岡古墳群	古墳	古墳時代		埴輪、土師器、須恵器	
平塚古墳	古墳	古墳時代	周溝、前溝、墓道	須恵器、土師器	
旧東海道石垣	交通	江戸時代	石垣、側溝、縁石	陶磁器	

市内遺跡確認調査報告書

- ・和田岡古墳群
- ・平塚古墳
- ・旧東海道石垣

2010年3月31日

発行 掛川市教育委員会
静岡県掛川市長谷一丁目1番地の1
TEL 0537-21-1158

印刷 (株)幸栄グラフィック
静岡県掛川市弥生町21
TEL 0537-24-4341 (代)

